

氏名	岡本 広毅
学位の種類	博士(文学)
報告番号	甲第408号
学位授与年月日	2015年9月19日
学位授与の要件	学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号) 第4条第1項該当
学位論文題目	Middle English Texts and History: Regional Dynamism and the Creation of National Identity in Romance, Fables, and the Chronicle (中英語テキストと歴史—ロマンス、ファブリオ、年代記に おける地方ダイナミズムとナショナル・アイデンティティ創 成)
審査委員	(主査) 菊池 清明 新妻 昭彦 不破 有理 (慶應義塾大学経済学部教授)

## I. 論文の内容の要旨

### (1) 論文構成

MLAのWorks Cited方式に則って英文で書かれたA4判171頁からなる本論文の構成は、以下の通りである。

Table of contents (目次)

Acknowledgements (謝辞)

Introduction (序章)

### Chapter 1

“Wassail, Sax, England”: the Founding of England in the *Brut Chronicles*  
(“Wassail” “Sax” “England”—『ブルート』におけるイングランド創設)

1. A Signal of the Saxon Invasion  
(サクソン人侵略の合図)
2. The “Sax” and “Saxon” Treachery  
(“Sax” とサクソン人による背信)
3. From the Saxon to the English  
(サクソン人からイングランド人へ)

### Chapter 2

The Rewriting of Nationhood and Ethnic Harmony in *Havelok the Dane*  
(『デー人ハヴェロック』における国家再考と民族的調和)

1. The Story of Havelok  
(ハヴェロックの物語)
2. The Danish Otherness  
(デー人の他者性)
3. “Here” and “Ferd”: Critique of English Nationalism  
(“Here” と “Ferd”—イングランド・ナショナリズムへの批判)
4. “Wassail” at Grimsby  
(グリムズビーでの “Wassail”)

### Chapter 3

Trojan Ancestry and Territory in *Sir Gawain and the Green Knight*  
(『ガウェイン卿と緑の騎士』におけるトロイの系譜と領土)

1. Troy, Aeneas, Gawain  
(トロイ、アエネアス、ガウェイン)
2. Gawain’s Treachery on the Bed  
(寝台でのガウェインによる背信)
3. “Here” and “Dis Londe”: Territory in Britain  
(“Here” と “Dis Londe”—ブリテン島の領土)

4. Richard II and Regionalism  
(リチャード二世と地域主義)

Chapter 4:

*The Reeve's Tale* and Regional/Marginal Identity  
(『荘園管理人の話』と地域・周縁のアイデンティティ)

1. The “Strange” North of England  
(“strange” なイングランド北部)
2. *The Reeve's Tale* and the Northern Dialect  
(『荘園管理人の話』と北方方言)
3. The North through a Norfolk Teller  
(ノーフォークの語り手による北部)
4. Chaucer's Marginal Otherness  
(チョーサーの周縁他者性)

Conclusion (結論)

Notes (注釈)

Works Cited (引用文献)

(2) 論文の内容要旨

本論文の主眼は、中英語文学作品に見られる歴史的意味合いを読み取り、地域性とナショナル・アイデンティティの諸相の一端を明らかにすることである。従来、中英語テキストはその地方性が過度に注目されるあまり、作品内に潜む広範な歴史的・文化的意義が看過される傾向にあった。本論文では、中英語作品に見られる〈地方と中央〉、〈周縁と中心〉という構図に深く着眼し、特定の地域に根差した作品であってもイングランドの歴史との緊密な関係性により、ナショナル・アイデンティティの確立に重大な意義をもつことを議論する。論者は、ブリトン人の建国神話を基調としながらも、ローマ人、ピクト人、サクソン人、そしてデーン人といった様々な民族・国家・地域との交流・混雑と領土支配の経緯を記述する、12世紀前半の Geoffrey of Monmouth (ジェフリー・オブ・モンマス) *Historia Regum Britanniae* (『ブリタニア列王史』)を、中世イングランドの歴史観の形成に大きく寄与した作品と評価し、本作品の複合的かつ多層的な歴史性により、後の作者たちは、それぞれの異なる視座から国家建国の有り様を問うことができたのである。テキスト内に見られるイングランド独自の歴史的背景を汲み取ることで、〈年代記〉〈ロマンス〉〈騎士道物語〉、そして〈ファブリオ〉といった従来のジャンル分けに基づく画一的な作品理解に異議を呈し、一定のテーマや様式にとらわれない多様な解釈を提示することも本論の目的の一つである。

第一章では、ジェフリーに端を発する年代記『ブルート』の継承と変容の過程を追い、イングランド国創設に至るまでの重要な契機として刻印されるサクソン人の言語の意義を

考察する。『ブリタニア列王史』の中に記される不実で背信的なサクソン人像は、ラテン語の書物に用いられる例外的な英語の使用とも深く関係している。サクソン人首領ヘンギストの娘ロウィーナが宴の席でブリトン人王に向けて発する“wassail”（乾杯の挨拶）の儀式は、サクソン人とブリトン人との血縁関係を促し、島内の勢力拡大・占拠を予兆する契機となる。また、ヘンギストがブリトン人との会合において、秘密裏に襲撃を企てる際に発する合図“nimet oure saxas”（ナイフをとれ）は、サクソン人支配を決定付ける虐殺の指令として描かれる。両英語の使用はサクソン人の覇権を暗示し、最終的にブリテン島が<イングランド>と命名される建国への布石となった。本章では、このエピソードに代表される<敵対者>としてのサクソン人を後の年代記作家がどのように受容したのかを考察する。とりわけサクソン人との連続性に帰する民族的自覚が芽生える13世紀末から14世紀初頭の時期に、年代記作家たちは祖先が関与した過去の背信をいかに甘受し、書き換えようと試みたのか、その過程を年代順に追跡することで中世イングランドに存在した様々な歴史の側面を解明する。

第二章では、13世紀末から14世紀初頭に書かれたとされる中英語韻文ロマンス *Havelok the Dane*（『デーン人ハヴェロック』）に焦点を当て、作品に潜む歴史性と地域的貢献のあり方を明らかにする。本作品の原典がジェフリーの年代記を踏襲した Geoffrey Gaimar（ジェフリー・ガイマー）の *Estoire des Engleis*（『イングランド人の歴史』）であるにも関わらず、作品内の歴史的記述との相関関係については検討がなされてこなかった。デーン人王子を主人公とする本作品は、イングランド本土におけるヴァイキングの侵攻と襲来の記憶を効果的に喚起し、その侵略と掠奪に代表される否定的なデーン人像に異議を唱えている。詩人の軍隊を表す語彙（“here”/“ferd”）の精妙な使い分けからも、当時の国威発揚の気運と一元的な歴史の捉え方に対する批判的眼差しを読み取ることができる。また、本作品がデーン人とイングランド人の友好・共生の理念を強く標榜する中英語作品の中でも極めて特異かつ重要な作品である点についても論及している。ハヴェロックは異国民でありながらもイングランドの辺境に位置する港町グリムズビーの創立の一翼を担い、リンカンシャーの地域社会に順応し、貢献する。それゆえ、デーン人ハヴェロックとイングランド王の正統継承者ゴールドバラとの結婚という物語の大団円は、単なる王家同士の表向きの縁組でなく、民族・国家間の友好と共生という意義を深化させ、二人の結婚を祝した宴の席で交わされる“wassail”<乾杯>の振る舞いは、民族間の融合という本作品の本質を見事に描き出している。年代記の伝統において、この慣習は、サクソン人がブリトン人に対して行う背信の過去として示されるが、詩人はこの歴史的背景を十分に認識している。両者の乾杯の行われる土地が地理的なパラレルとして反響していることを指摘した上で、詩人は“wassail”という言葉と慣習の背後に潜む血塗られた民族間の争いを肯定的かつ劇的に書き換え、多民族・多文化の共存と尊重という自身の地域的・民族的主題へ華させていると結論づける。

第三章では、14世紀末に書かれた中英語アーサー王ロマンス、*Sir Gawain and the Green Knight*（『ガウェイン卿と緑の騎士』）を中心に、冒頭と掉尾を飾るトロイ人のブリテン島建国神話と円卓の騎士ガウェイン卿のイングランド北西部への冒険譚との関連性について論究する。従来、冒頭スタンザで記されるトロイ人の離散とブリテン島創設の様子は、頭

韻詩に見られる定型的特徴としてその意義は等閑視される傾向にあった。しかし、本章では、この冒頭の歴史的記述こそが、一見虚構に見える本ロマンスとナショナル・アイデンティティとの結びつきを強く喚起させ、同時代のガウェイン・ロマンス群に見られる〈地方と中央〉〈周縁と中心〉という構造を巧みに逆転させ、その中で地方特有の視点とその地域的・領土的アイデンティティが密々に主張されていることを指摘している。また、叙事詩的雰囲気の下で幕を開けるガウェイン卿の旅は、滞在先の地方宮廷で体験する試練、特に領主ベルティラックの奥方レディ・ベルティラックからの誘惑を介して、トロイのアエネアスの背信の主題を想起させ、〈個人と歴史〉の相互関係を浮き彫りにしていることについても論及している。最後に、ブリテン島創設の歴史を背景にし、突如キャメロット宮廷に闖入してくる「緑の騎士」の意義に触れながら、この文学的創造が〈年代記〉と〈ロマンス〉という恣意的分類を解消し、中英語テキストがもつ〈地方/辺境のダイナミズム〉の一つの極点を表象していることを確認する。両物語は互いに緊密に連関し合い、本作品における〈地方と中央〉という構造的により明確な意味合いを与え、ブリテン島周縁地域がもつ固有の文化、歴史的諸相、そして内在するアイデンティティの複合性、これらすべてを浮かび上がらせるという限りなく重要な役割を担っていると結論づける。

第四章では、中心都市ロンドンから同じイングランドの一地域に目を向ける Geoffrey Chaucer (ジェフリー・チョーサー) のイングランド人としての意識を探る。一般に〈英詩の父〉と称されるチョーサーは、「イングリッシュネス」を体現する作家として連想されやすいが、代表作 *The Canterbury Tales* (『カンタベリー物語』) において、自国の過去や伝統を賛美し民族的・文化的優越性を鼓舞するような人間は見当たらず、むしろヨーロッパ文化圏という中心に対し、自国を「地方・周縁」として捉える作者の自意識が見え隠れしている。首都ロンドンを拠点とする「地方人」としてのチョーサーのこの自覚は、*The Reeve's Tale* (『荘園管理人の話』) におけるイングランドの北部表象に逆照射され、作品全体の内容を一層劇的にする。北部出身のケンブリッジの学生アレンとジョンと粉屋シムキンのやりとりを中心とする本作品は、大陸のファブリオという滑稽譚・艶笑譚に由来する一方で、チョーサーはそのジャンルのもつ特徴的な言葉遊びや言語的技巧をイングランドにおける一地域の方言として発展させ、作品内に織り込んでいる。学生の北部方言の使用に関して、J. R. R. Tolkien は作者チョーサーの卓越した観察眼と言語感覚を高く評価したが、本章では北部方言の意義はそうした一個人の関心事にとどまるものではなく、チョーサーという詩人は真の国際的観念を内包しながら英語という土着語に固執したものと推察する。当時、年代記の中で北部地域の言語に対する、音の奇怪さ・特異さが指摘されていたが、チョーサーは本作品においてそうした南部人からの偏見あるいは揶揄を一切描いていない。それどころか方言を話す学生が最終的に勝利を収める形で物語は幕を閉じる。また、従来、北方方言は終始一貫して学生の発話に盛り込まれていると考えられてきたが、物語の終盤、学生アレンが粉屋シムキンの娘マリンとの一夜を明かした後に、それまでの色濃い北部方言の使用は急激に減少している。主要な写本の調査からもこの現象は実に特異であり、北部と南部の間に想定される言語的溝を解消しようとする作者の意図的な試みであると指摘する。それは語り手を南北の中間に位置するノーフォーク出身と設定することによってより現実味を帯びる。概して、チョーサーはヨーロッパの一边境人として、国

内における一地方の変化・変容のダイナミズムを巨視的に把握し、方言に象徴される周縁の文化や歴史に尊厳を配することで新た生み出される国家繁栄の指標を限りなく希求、或は幾度となく摸造していたことを論証している。

以上の検証と考察から、中英語の主要なテキストは、個々のジャンルの特質や一地域の環境に限定される物語ではなく、作品の背後に潜む言語・文化的意味合いを精細に取り取ることで広く歴史とナショナル・アイデンティティの概念を包摂した重要かつ注目すべき文学作品であると結論づける。

## II. 論文審査の結果の要旨

### (1) 論文の特徴

中英語文学は、これまで年代記、ロマンス、騎士道物語、ファブリオといった、ジャンルに基づく裁断的な作品批評・解釈に終わることが多かった。本論文は、従来のジャンルによる画一的な作品理解に異議を唱え、テーマやジャンルにとらわれない多様な解釈を提示している。従来、中英語テキストはその地方性が過度に注目されるあまり、作品内に潜む広範な歴史的・文化的意義が看過される傾向にあったとし、中英語文学作品に見られる歴史的意味合いを読み取り、地域性、イングランド建国、そしてナショナル・アイデンティティの諸相を明らかにする。とりわけ、中英語作品に見られる〈地方と中央〉、〈周縁と中心〉という構図に着目した上で、特定の地域に根差した作品であれ、イングランド全体の歴史との緊密な相関性があったとし、それぞれの作品が、ナショナル・アイデンティティの確立に寄与し、重要な意義をもつことを検証している。本論文において、論者は、ブリトン人の栄華を称揚する建国神話を基調としながらも、ローマ人、ピクト人、サクソン人、そしてデーン人といった様々な民族・国家・地域との交流・混淆と領土支配の模様を映し出す、12世紀前半の *Geoffrey of Monmouth* (ジェフリー・オブ・モンマス) による *Historia Regum Britanniae* (『ブリタニア列王史』) を中世イングランドの歴史観の形成に大きく寄与したと評価している。本年代記における、複合的・多層的な歴史性ゆえに、後の作者たちは、それぞれの異なる視座から国家建国の有り様を問うことができたのであり、テキスト内に見られるイングランド独自の歴史的背景を読み取ることが可能という論者の指摘により、これまでにない作品解釈が本論において提案されている。

第一章では、ジェフリーに端を発する『ブルート』の継承と変容の過程に焦点をあて、イングランド国家創設に至るまでの重要な契機として刻印されるサクソン人の言語の意義を明らかにする。こうした視点や問題意識は、これまでほとんど正面から論じられてはいない。本論は、“wassail” (乾杯の挨拶) と “nimet oure saxas” (ナイフをとれ) という二つの英語表現の使用に注目し、サクソン人との連続性という民族的自覚が芽生える13世紀末から14世紀初頭の時期に、年代記作家たちは祖先が関与した過去の背信をいかに甘受し、書き換えようと試みたのか、その過程を年代順に追跡することで、中世イングランドに存在した様々な歴史の側面を解明している。

第二章は、第一章で論じた点を踏まえつつ、中英語韻文ロマンス *Havelok the Dane* (『デ

ーン人ハヴェロック』)に焦点を当て、作品に内在する歴史性と地域的貢献のあり方を再検討するものである。多くの先行研究は、本作品の原典がジェフリーの年代記を踏襲した Geoffrey Gaimar (ジェフリー・ガイマー) の *Estoire des Engleis* (『イングランド人の歴史』)であるにも関わらず、作品内の歴史的記述との相関関係については検証していない。こうした問題点を再考すべく、本論では、本作品がデー人人とイングランド人の友好・共生の理念を強く標榜する中英語作品の中でも極めて特異かつ重要な作品である点について論及しつつ、詩人が、言葉と慣習の背後にひそむ民族間の争いを肯定的に書き換え、多民族・多文化の共存という地域的・民族的主題へ昇華させていると指摘する。

第三章は、14世紀末のアーサー王ロマンス、*Sir Gawain and the Green Knight* (『ガウェイン卿と緑の騎士』)を取り上げ、とりわけ冒頭と掉尾において記述される、トロイ人によるブリテン島建国神話と円卓の騎士ガウェインの冒険譚との関連性をめぐる詩人の認識を再検討するものである。従来、作品で描写されるトロイ人の離散とブリテン島建国の経緯は、頭韻詩に見られる定型表現としてその意義は等閑視されてきたが、本論では、冒頭と掉尾の歴史的記述が、ロマンスとナショナル・アイデンティティとの密接な関連性を喚起させ、他のガウェイン・ロマンス群に見られる〈地方と中央〉〈周縁と中心〉という構造を巧みに逆転させ、その中で地方特有の視点とその地域的・領土的アイデンティティが主張されていることを指摘する。また、本作品の〈地方と中央〉という構造は、ブリテン島周縁地域の固有の文化、歴史的諸相、アイデンティティの複合性を浮かび上がらせる役割を担っているという新たな解釈を提供している。

第四章では、ヨーロッパ文化圏という中心に対し、自国を「地方・周縁」として捉える Geoffrey Chaucer (ジェフリー・チョーサー) のイングランド人としての意識を探っている。本論は、ジャンル特有の言葉遊びや言語的技巧をイングランドにおける一地域の方言として発展させ、作品内に織り込んでいるプロセスに注目している。本論の特徴は、北部方言の意義を一個人の関心事にとどめることなく、地方の変化・変容のダイナミズムを巨視的に把握し、方言に象徴される周縁の文化や歴史に生み出される国家創成の指標が希求されていることを論証している点にある。

本研究は、これまで考察されることのなかった、個々のジャンルの特質や一地域の環境に限定されてきた中英語の主要なテキストに内在する歴史とナショナル・アイデンティティの概念に注目し、その言語・文化的意味合いを精細に読み取ることにより、社会歴史的要素を包摂した中英語文学テキストの新たな側面とその重要性を提供するものである。

## (2) 論文の評価

本論文の意義は以下のように要約される。

本論文は、従来、その地方性が過度に注目され、作品内に潜む広範な歴史的・文化的意義が看過される傾向にあった中英語テキストを、〈地方と中央〉、〈周縁と中心〉という不可分の構図に着眼することで、年代記、ロマンス、騎士道物語、そしてファブリオといった従来の閉鎖的なジャンルの枠組みから開放し、地域に根差した作品にイングランドの歴史との緊密な関係性とナショナル・アイデンティティの諸相を見出した点において、本研究の功績は大きい。特に、従来の中英語作品をそれぞれのジャンルの枠組みから解放する

ことにより、テキスト内に見られるイングランド独自の歴史的背景を読み取り、ジャンル分けに基づく画一的な作品解釈や一定の主題や様式にとらわれない多様な解釈を可能にしている。年代記『ブルート』、中英語韻文ロマンス *Havelok the Dane* (『デーン人ハヴェロック』)、チョーサーのファブリオ、*The Reeve's Tale* (『荘園管理人の話』)、そして14世紀末のアーサー王ロマンス、*Sir Gawain and the Green Knight* (『ガウェイン卿と緑の騎士』) という中英語文学の主要な作品を取り上げ、従来とは全く違った視点から、これらの作品を考察したことは、本論文の特筆すべき功績である。主として〈地方と中央〉〈周縁と中心〉に焦点をあわせ、ブリテン島周縁地域の固有の文化、歴史的諸相、そしてアイデンティティの複合性を浮かび上がらせ、作品解釈を展開する手続きはこれまでにはなかったものである。また、マクロとミクロ両面から、主要な中英語作品の歴史性とナショナル・アイデンティティの諸相に批判を加え、明晰に分析する手法の鮮やかさは、高く評価されてよい。ただ、中英語作品に見られる歴史的な側面やナショナル・アイデンティティへの言及がこれまでなかったわけではないが、本論文の独自性は、第三章、第四章において展開している通り、むしろそうした諸相を作品のテキストの中に位置づけ、さらには具体的に意義づけることにより、主要な中英語作品にひそむ歴史性とナショナル・アイデンティティとを偏りなく捉えようと果敢に取り組んだ点にある。今後の更なる活躍を大いに期待させるものである。本論文の第二章と第三章を構成する論考が、それぞれ国際的な学会誌である、*Studies in Medieval English Language and Literature* と *Studies in English Literature* に掲載されていることから分かるように、その英文は申し分なく、提出された論文には、数点の綴りの間違いを除き、文法上の誤りは見当たらない。

ただし、作品の選択と議論の内容に関し、未解決のまま、今後に残された課題もなくはない。ひとつには、中英語作品の主要な作品がその考察対象となっているとはいえ、John Gower による *Vox Clamantis*, *Confessio Amantis*, William Langland の *Piers Ploughman* といった14世紀イギリスの混沌とした政治状況と宗教事情が反映されている作品は、本論文においては取り扱われてはいない。こうした作品への分析は、今後、本論文の主題からも当然、その考察対象となりその評価を示す必要があるといえるだろう。また、用語の定義においてやや曖昧な点が挙げられる。例えば、「ナショナル・アイデンティティ」の用語は、本論文においてキーワードになっているにもかかわらず、その概念規定は示されておらず、どのような意味でこの概念を用いているのか、本論文の内容をより明確に提示し、理解してもらうためにもその定義を示す必要があるだろう。「イングリッシュネス」という用語についても同様な点を指摘できる。本論文は、文学と歴史という異なる分野にまたがる学際的なアプローチと考察を目指しているが、歴史という分野の研究に特化した一次資料の提示が十分だとは言いがたい。このように、いくつかの課題が指摘されたが、本論文で提示されたアプローチと内容は、中英語英文学研究を一步進めることに貢献する論文であり、その意義と成果については高い評価を与えてよい。